

4 全国ブリ定置網漁業最近の動向

—ブリ資源を中心に—

鐵 健 司 (東海水研)

1. 定置網漁業の推移

昭和51年度の農林省による漁業養殖業生産統計年報では、定置網業はさけ・ます定置網、その他の大型定置網、小型定置網に分類され、その漁獲量は3.4、16.5、13.3万トンとなっている。昭和33年以降51年までのさけ・ますをのぞいた大型および小型定置網漁業の動きをみると以下のようなものである。

漁獲量：昭和33年当時14万トンと全定置網の漁獲量の2/3を占めた大型定置網の漁獲量は年々減少傾向を示し、昭和41年の10万トンを底にその後徐々に回復し、昭和50年には18万トンにまで増大している。小型定置網は年々増加傾向を示し7万トンより13~14万トンの水準にまで達している。

着業統数：大小定置網いずれも昭和30年代は減少傾向を示し、40年代に入ってからは、大型定置網で7~800統、小型定置網では1.2万統前後の水準で横這状態にある。

統当り年漁獲量：統当り年漁獲量は、大小定置網いずれも年々増加傾向を示す。大型定置網では昭和30年代100トン程度から50年代には200トンの水準をこえ、また小型定置網では5トンから10トン程度といずれも2倍に増大している。

以上から定置網漁業の対象となる資源は増加傾向にあるとみられる。しかし着業統数の減少に伴う一統当りへの漁獲資源の配分の増大や漁獲性能の向上など、漁獲量の増加をそのまま資源の増大と結びつけることのできない要素もある。

2. 定置網漁業とその資源

定置網に入る魚の種類は、相模湾についてみると、沿岸回遊魚を中心に瀬付魚・底魚と表・中・底層にわたって約150種に及び、この他にイカ類や甲殻類なども含めて考えると魚種組成は極めて豊富であり、定置網漁業の一つの特性とみなすことができる。したがって定置網の漁獲物として、どのような魚種が多いかその魚種組成を知ることが定置網漁業の資源を考える上で重要となる。

相模湾の米神漁場における主要な魚種の漁獲量について、昭和30年以降の推移をみると、ブリ・アジといった経済価値の高い魚種が昭和30年代には漁獲量の大半を占

めていた。近年その漁獲量は著しく減少し、反面経済価値の低いウマヅラハギの増大をみ、魚種組成の大きな変化を知ることができる。

漁家経営の立場からは、魚種構成が極めて重要であり、単に漁獲量の増大といった現象から、定置網漁業不振の声を否定するわけにはいかないことがわかる。

3. わが国のブリ漁業とその資源

東支那海の中・南部、南西諸島水域で春うまれたブリは、成長に伴って日本列島周辺に広く分布し、成長の各段階で、旋網・釣・定置網など各種の漁業によって漁獲されている。食性段階は高く、また定置網や釣といった漁具で漁獲される割合が大きいため、従来ブリ資源は比較的安定した資源とみなされていた。たしかにその漁獲量を全国的に眺めてみると、明治27年以降、年率1.8%の割合で2万トンから最近では天然ブリとして5万トン前後の水準にまで安定して増加していることがわかる。しかしハマチ養殖種苗としてのモジャコの大量採捕、旋網による漁獲の強化、定置網漁獲量の急減など安定した資源としての印象もかわりつつある現状といえよう。

1) ブリ資源の利用法の変化

ブリ資源は定置網にかぎらず、旋網・釣・刺網など多くの漁業によって利用され、また養殖種苗としてモジャコも大量に採捕されている。昭和30年当時ブリ漁獲量の80%を占めていた定置網漁業は、40年には35%、50年には12%とその割合は急減している。他方旋網・釣・刺網等による漁獲量は徐々にあるが30年代には増加傾向を示し、40年には40%を占め、定置網の漁獲量を凌駕している。しかしその後は養殖ハマチの急激な生産のびにおされ、50年には約16%にとどまっているが、なお定置網の漁獲量を上回っている。また養殖ハマチは40年には25%、50年には9.2万トン72%を占めるまで急速のびている。

以上にみられるようにここ20年間におけるブリ漁業の形態は、定置網を中心としたかつてのブリ漁業とは様相を大きく異にしていることがわかる。

2) 海域別漁獲量の変化

太平洋海域における漁獲量の激減、日本海および東支

那海域における漸増傾向、とくに40年代に入って太平洋海域を上廻る日本海区の漁獲量など、海域によって異なる経年変化を示している。しかしいずれの海域においても定置網による漁獲量が近年減少傾向にあることが注目される。

4. 太平洋ブリ資源について

わが国周辺には、太平洋沿岸域・日本海沿岸域および朝鮮半島東岸域と3つのブリの系群が存在するとされている。ここでは太平洋沿岸域のブリ資源に焦点をあてて、その動向をさぐってみる。

1) 海域別県別漁獲量の推移

最近20数年間の太平洋沿岸域の漁獲量をみると、千葉より三重までの太平洋中区の漁獲量の減少傾向は著しい。南区も漸減傾向にあるが中区ほどではない。北区は横這状態であるが、ここ数年減少傾向が激しい。次に減少傾向が大きい中区を県別に眺めてみると、神奈川・静岡の落ち込みが大きい。三重も減少傾向にあるが、神奈川・静岡ほどではない。他方千葉は比較的高い水準の漁獲量を維持しながら横這状態を示している。しかし太平洋北区の諸県と同じように、ここ数年の漁獲量は大きく落ちこんでいる。太平洋諸県の漁獲量の経年変動のパターンから、定置網漁業を中心とした諸県と、千葉～福島など定置網と共に旋網漁獲の漁獲の多い房総常磐海域の諸県とは異なる変動をしていることがみられる。

2) 漁業種類別漁獲量の推移

太平洋中区における代表的なブリの生産県として、千葉および神奈川両県をとりあげて漁獲量の推移を漁業種類別にみってみる。神奈川県下のブリの生産は、圧倒的に定置網によって占められ、大きく減少傾向を示している。釣による漁獲量は少ないが、減少傾向はみられない。千葉県は旋網が中心で横這状態である。定置網の漁獲量は神奈川と同じように減少、釣は上昇傾向にあることが理解される。

3) 利用ブリの若令化傾向

定置網漁業が対象とするブリの銘柄は、小型定置網や夏網では0～1才のワカシやイナダの入網もみられるが、大型定置の冬網では3才以上のブリ成魚が主対象となり、この成魚ブリの不振が各地で問題となっている。

旋網による漁獲は1才魚であるイナダを中心として、0才のワカシ・2才のワラサを対象とする。最近では3才以上のブリ成魚も対象となりつつある。釣・刺網・延

縄漁業でもワカシ・イナダが中心であるが、釣ではワテサやブリも対象に入っている。

したがって定置網漁業が中心であった時代にくらべ、最近のブリ漁業はモジャコの採捕も含めて若い時代での漁獲が強化される先行漁獲型、またブリ成魚を定置網だけでなく釣や旋網でも漁獲するといった配分漁獲型の色彩を強めている。定置網によるブリ不振の一因をここにも求めることができる。

4) ブリ成魚資源の動向

若令ブリの漁獲の強化が成魚資源にどのように影響するかは、各漁業種類別の漁獲統計、年令や体長組成などの生物統計の調査、また標識放流調査などの資料を用い、ブリの成長・死亡の大きさや漁獲の強度などを推定して知ることができる。

10年ほど前の試算ではモジャコ採捕の影響は、ブリ資源の10%程度の減少につながるものとされた。また若令ブリの漁獲の程度を、昭和40年から30年程度の強度にもどすとブリの成魚資源は50%増加するといった計算結果もえられている。ただし後者の場合0～2才の若令ブリの漁獲の減を考えると、ブリの総漁獲量では大きな変化がないことが指摘されている。またハマチ養殖による生産量は、モジャコ期における自然死亡率の高さから、自然の海で成長させてそれを漁獲することから期待される漁獲量をかなり上廻るものと思われる。

しかしながらブリ資源の動向を考えると、ブリ成魚資源の減少の再生産への影響が懸念される。ここ数年特に房総以北の各県でワカシ・イナダ等若令ブリの来遊が著しく減少している点に注目する必要がある。

等漁獲量曲線を用い、漁業への加入後のブリ資源の有効利用を検討すると、漁獲強度のこれ以上の強化は、決して総漁獲量の増加に結びつかないこと、また体長30cm程度からの利用を50cm程度にひきあげるることによって、15～20%程度の漁獲増が期待されるなどの結果がえられている。

以上太平洋のブリ資源は、最近20年間の漁業の変化にともなって、その利用は若い時代に先どりされる傾向を強め、総漁獲量は減少しつつある。ブリ成魚資源の減少は沿岸域の荒廃と相まって、定置網漁業におけるブリ不振となり、また将来の再生産にも一つのかけを与えつつあるようにも思われる。